＜報告・記録＞

音楽表現のアウトリーチ活動と期待される成果

―― 就学前児童を対象とした調査結果を踏まえて ――

黒田宣代・徳留勝敏・堀尾邦子
東亜大学　人間科学部　心理臨床・子ども学科
kurodan@toua-u.ac.jp　tokudome@toua-u.ac.jp　horio@toua-u.ac.jp

《要　旨》

本研究は，「保育所保育指針」（平成 29 年告示）における感性と表現に関する領域に照射したものである。そこでの「内容および内容の取扱い」において示されている音楽やリズムそして歌を歌う等の音楽体験に関わる内容から，子どもに培われると思われる豊かな感性ならび想像力や表現力を構築させていくためにどのような取り組みが必要なのか探究することを目的としている。

2 年前に，私たちは，上述した同様の目的からある幼稚園においてアウトリーチ活動を実施し，一定のフィールド調査結果を得た [1]。本研究は，その調査結果も踏まえながら，今回の調査対象を保育園として，そこでの音楽表現環境の実態と子どもの感性や表現力等の育成について考察するものである。

キーワード：アウトリーチ活動／就学前教育／発達課題／追跡比較研究／表現力

1. 研究の目的

本研究は，音楽やリズムそして歌を歌う等の表現体験に関わる内容を対象とした研究である。これは，「保育所保育指針」ならびに「幼稚園教育要領」（平成 29 年告示）における感性と表現に関する領域「表現」についての「内容」および「内容の取扱い」においてで示されている，子どもが培われると思われる豊かな感性ならびに想像力や表現力を構築させていくための様々な取り組みの一助となることを想定している。

そこで，本研究では昨年度調査した幼稚園に引き続き，今回，4 つの保育園 [2] をフィールドとして，そこに在籍する園児の音楽における実体験を通じて，就学前児童の音楽教育における研究調査を実施することにした。

1 － 1. 本研究における先行調査

本研究は，1 年前に実施した研究調査結果をベースとした追跡調査として位置づけられるものである。その先行調査とは，本研究と同じく，同市内に在る一幼稚園で実施された音楽教育におけるフィールド調査である。そこでの調査 [3] においては，子どもが日常より CD から流れる BGM や音楽会を通して音に慣れ親しむことにより，音程感覚やリズム感が自然に備わりはじめることが期待できると仮定した。そして，調査結果から，園児が音楽に興味を強く持ち始め，楽器を用いて演奏したいという動機や，園生活の中に音楽環境を新たに作ることで，園児たちの興味や反応がどのように変化し，園児の成長につながりうるのかについての情報やデータを抽出することができた。

昨年度のフィールド調査においては，結果的に対象児が幼稚園児のみ [4] となったことから，今回は，新たに保育園児を対象として同様の調

査を試みた。

2. 研究調査方法

本研究における調査法は，対象をある保育園に在籍する園児とした，ショートスタンスの観察法である。その方法は，先行した幼稚園調査と同様に，まず初めに園内にてある一定の時期，クラッシック音楽をBGMとして流し，その音楽に園児が親しみを持ち耳に慣れることを期待する。その後，園児の耳にBGMが定着したと思われるおよそ1ヶ月半経過して，園内でBGMとして流した同じプログラムで音楽コンサートを開き，その時の園児の反応を観察するという方法である。ここでの観察者は，園で働く保育士[5]ならびに演奏者[6]とし，それらの観察により，アンケート調査と聞き取り調査によるデータを抽出するという方法である。

2－1. 調査方法――そのⅠ（BGM）

調査方法の順序としては，まず，そのフィールド環境において，適当と思われる園生活の一定のタイミングで選曲された数曲のBGM音楽をCD等で流す等の試みを習慣化することで，子どもらの行動にどのような変容が生じるかを観察する。

そこで，今回は，3つの保育園において，お昼の給食時間を中心に利用し，以下の音楽をBGMとして約1か月半程度[7]流してもらった。選曲名は，①シューマン作曲「子供の情景より7曲」，②ショパン作曲「子犬のワルツ」，③ドビュッシー作曲「アラベスク1番」，④モーツァルト作曲「トルコ行進曲」の計4曲である。また，その演奏時間は，各25分程度である。選曲にあたっては，音楽環境として，豊かな響き（和音）・リズム・旋律があることを重視し，あえて子ども向けの曲目とはしなかった。そして，上述の4曲を入れたCDでリピート機能を使い，園児の活動，先生方の指導の邪魔にならない音量で平日の昼食時間に流した。

この音楽（CD）を流す期間における園児の反応については，園内の保育士にアンケート調査を実施し，観察者（園内の保育士）の自記式における調査結果の抽出を試みた。さらに，CD（音楽）が流れている時間における子どもの具体的な様子や反応については園長先生や保育士に聞き取り調査を実施することで情報を確保し，質的データを抽出した。

2－2. 調査方法――そのⅡ（音楽会）

次の段階として，子どもがCD音楽（BGM）に耳慣れしたと思われる時期（概ね1か月半すぎ）に，CDで使用した同じ曲目のプログラムで音楽会[8]を行った。これは，音楽環境作りでCDによるBGMで使用した音楽を幼児がピアノとヴァイオリンによる生演奏を通して，どのような反応を示すのかを観察しようとするものである。演奏会後，園児たちの様子や反応を当日，アンケートにより保育士の先生方に回答していただき，かつ，園長先生や保育士からの聞き取り調査を行い，データを抽出した。

2－3. 調査方法――そのⅢ（音楽環境の実態）

最後に，前述の3つの保育園の他に同地域における1園を加え，計4つの保育園を対象として，音楽環境についての実態調査を実施した。これは，前年度調査した幼稚園では実施していないもので，今回が初めての試みである。そこでは，各園における音楽表現の内容や時間，さらに，園に備わっている楽器の種類などについても調査した。

3. アンケート内容と調査結果

今回の「そのⅠ（BGM）」ならびに「そのⅡ（音楽会）」のアンケート質問においては，昨年度実施した幼稚園での調査アンケート結果との比較のため，同様のものを実施した。その際のアンケート内容については引用文献（黒田・徳留2021）を参照して頂くこととし，本論では割愛する。上述した3つのフィールド（保育園）における本調査結果は以下のとおりである。

3－1. アンケート回収方法と分析結果

調査は，まず調査先の各保育園の保育士に自

記式のアンケートを配布し，留め置きとした。そして，シートは後日，研究調査者が回収するという流れで実施した。回収した調査シートは，約30～40枚前後だったこともあり，量的調査というよりもむしろ質的調査として分析することで，より詳細な結果が得られるように思われた。したがって，以下，質的データに焦点を絞り述べていく。

3－1－1. 分析結果そのⅠ（BGM）

今回の保育園調査（BGM）においては，前年度の幼稚園調査との比較において差が見られず，全体的に幼稚園調査と同様の結果が見受けられた。

たとえば，初期段階では，園児にとってクラッシックCDが流れるという環境づくりが新鮮であったということで，音楽への興味・関心が高くなっている様子がうかがえた。その一方で，その関心には個人差が見られ，興味を示さない子どもも存在した。また，保育士の立場からは，CDによる音楽環境は黙食にも繋がり，結果としてよかったとの報告があった。

3－1－2. 分析結果そのⅡ（音楽会）

本結果（音楽会）においても，前年度の幼稚園同様，特段の新奇性は見られない。音楽会で生演奏を聴いた園児の反応は，事前にCDで音楽環境に慣れ親しんだ後に設定されたものであったがゆえに，大きかったようである。これについては，園児同士が音楽会・楽器等についての感想を伝え合う，あるいは，園児が先生に演奏について何かしらの意見を伝えに来るなどの様子が見られたということからも推察できる。また，昼食時のCDを通した音楽環境で耳慣れた音楽を実際のピアノやヴァイオリンによる生演奏で聴くことができたという体験は，子どもらの刺激を強化したようである。

3－1－3. 音楽会の聞き取り調査結果

上述したアンケート調査に照らしつつ，同時に演奏者や保育士の視点から見た状況についても聞き取りによって調査を実施した。その結果，保育士からは，演奏会で，適度な緊張感と通常の保育園行事と異なる礼節の良い機会ができたとの好意的な感想が得られた。音楽会における3つの保育園の園児たちの視聴の様子がいずれも真剣であったことは，保育士の先生方から見ても予想外なものであったようである。そのこともあってか，今後も更なる音楽アウトリーチの機会の提供について要望があった。

3－1－4. 音楽環境実態調査結果

ここでは，調査対象を保育園4園として，音楽環境実態として調査した。調査結果は，後述の通りである。本結果においては，比較となるものがないため，今回は，S市内における4つの園の結果（質問1～4）のみの記述とする。

表1：実態調査アンケート結果①

問1	園内の音楽活動機会について。
K園	クラス活動・自由遊び時間・昼寝時
M園	集合時・待機時
N園	登園・降園・クラス活動・発表会・集合時
Y園	登園・降園・クラス活動・発表会・集合時

表2：実態調査アンケート結果②（単位：1時間）

問2	1日における音楽活動時間について。
K園	3時間
M園	1時間
N園	1時間
Y園	3時間

表3：実態調査アンケート結果③

問3	園内の音楽活動内容について。
K園	童謡歌唱・和太鼓演奏で年1回発表会
M園	童謡・季節の歌と楽器の合奏
N園	童謡歌唱
Y園	リトミック活動・アニメソングで体操

表4：実態調査アンケート結果④

問4	園内楽器（下記参照）で無い楽器について。
K園	弦楽器・管楽器
M園	弦楽器
N園	打楽器B・弦楽器・管楽器
Y園	打楽器B・弦楽器・管楽器

〔打楽器A〕

① カスタネット□

② タンバリン□
③ 拍子木□
④ ウッドブロック□
⑤ トライアングル□
⑥ 鈴□
⑦ 太鼓□

〔打楽器B〕
① ハンドベル□
② トーンチャイム□
③ 木琴□
④ 鉄琴□

〔鍵盤楽器〕
① 鍵盤ハーモニカ□
② 小型キーボード□
③ アコーディオン□

〔弦楽器〕
① ウクレレ□
② 箏□

〔管楽器〕
① ハーモニカ□
② リコーダー（笛）□
③ オカリナ□

〔その他〕
① 手作り楽器□
② オモチャの楽器□
③ その他【　　】

4. 本研究調査の総括

ここで，本調査についてまとめてみよう。まず，音楽表現のアウトリーチ活動（BGM 環境設定と音楽会開催における質問）として，以下の 1）～ 7）の質問を設定し，保育士ならびに演奏者より回答を得た。

1）給食時等の BGM 環境における園児の反応等，BGM 効果を含む質問。2）興味を持った園児の反応等，興味度を含む質問。3）給食時の音楽環境設定での問題等を含む質問。4）音楽会開催で，実際の演奏を聴いた園児の反応を含む質問。5）音楽会終了後の園児の様子を含む質問。6）BGM 環境と音楽会との関連を含む質問。7）アウトリーチ活動における質問である。

次に，音楽表現活動環境の実態として，以下の 1）～ 3）の質問を設定し，保育士ならびに演奏者より回答を得た。1）園内における音楽活動時間数とその活動内容。2）園内で保有する楽器の種類。3）音楽表現活動における自由記述 (9) である。

上述した調査から，以下のような結果が得られた。まず，2 年前の幼稚園における音楽表現のアウトリーチ活動と同様に，給食時等の音楽 CD 導入という刺激ならびにその後の音楽会開催という刺激に対する園児らの反応には，一定の因果関係が見られた。総じて，音楽の表現機会を重ねることにより，園児の集中力や感性，自己表現力が豊かになってくることが推察された。これは，音楽会の開催を通してプロの演奏者におけるピアノやヴァイオリンの音楽を直で聴く機会を経験として持つことにより，なお一層，強化されていると考えられる。また，一方で音楽表現の刺激に反応しない園児も一定数存在することも分かった。

5. 本研究調査の省察と今後

上述してきたように，園児は，CD による音楽環境の構成で使用した曲に耳慣れたことで，演奏に対する反応が豊かになった。そして，実際の楽器による演奏が直に視聴できたことで反応が一層強化されるということが顕著に表れていた。また，選曲が特に子ども向けの曲でなくとも，様々な反応が見られた。そして，このような園児の反応から，保育士より音楽アウトリーチへの必要性が唱えられた。

音楽アウトリーチとは，演奏会やコンサートに出かけていくのではなく，演奏家が幼稚園や保育園などの現場に出かけ，演奏を行い，音楽教育普及等を目的とする活動の事である。すでに各教育機関にて，様々な音楽活動も見受けられるが，今回，調査した保育園や前回調査した

幼稚園においては，音楽アウトリーチ機会がこれまで皆無であったことが判明した。したがって，今後，こうした活動の導入において，その必要性を保育士に質問すると「必要」との回答が100％示され，さらに音楽会開催としては，年1回もしくは年2回の機会を希望するという情報が得られた。

他方，上述した音楽表現刺激に反応しない一定数の園児が存在するということにおいては，発達段階ならびに発達障害という因子等との関係を精査する必要があると思われる。さらに，聞き取り調査より得られた情報として，ベテランの保育士と若手の保育士において，童謡（わらべ歌含む）に対する子どもへの表現対応において違い（前者は良く知っているが，後者がほとんど知らないという現状がある）があることが分かった。これらの視点も踏まえ，今後の課題としていきたい。

6. 引用・参考文献

引用文献

1）厚生労働省（2017），「保育所保育指針」非売品，わかば社。
2）黒田宣代・徳留勝敏（2021），「幼児期における表現力構築への試み」,『東亜大学紀要』, 32，pp.47-55。
3）文部科学省（2017），「幼稚園教育要領」非売品，わかば社。

参考文献

1）小林洋子・沼田峰紀（2021），『音楽教育のススメ』幻冬舎。
2）笹森壮大（2018），『幼児期だからこそ始めたい一生ものの音楽教育』健康ジャーナル社。

7. 付記

本報告は，一般社団法人全国保育士養成協議会における令和3年度ブロック【中・四国】研究助成（研究代表者：黒田宣代／共同研究者：徳留勝敏・堀尾邦子）を受け，実施された。末筆ながら，この場をお借りして感謝の意を表したい。

また，今回のフィールド調査において，快くアンケート調査や聞き取り調査にご協力いただいたS市内の4つの保育園の園長先生ならびに主任の先生方をはじめ，多くの保育士の皆様にも心からお礼を申し上げたい。

注

(1) 成果内容においては，黒田宣代・徳留勝敏（2021），「幼児期における表現力構築への試み」,『東亜大学紀要』, 32，pp.47-53. において報告。本研究は，令和2年度中・四国保育士養成協議会教職員研究費助成（研究代表者：黒田宣代）を受け，調査研究できた。

(2) 下関市内の社会福祉法人の保育園4園（K園：98名，M園：約120名，N園：約110名，Y園：約80名）。

(3) 山口県下関市内にあるカトリック系の幼稚園。3歳，4歳，5歳園児総数は98名。本研究調査結果は，東亜大学紀要第32号「幼児期における表現力構築への試み」として報告している。

(4) 調査当初は，幼稚園と保育園とを調査予定でスケジュールを組んでいたが，コロナ事情により，保育園でのフィールド調査が実施できなかった。

(5) 今回の調査では，園内の保育士（クラスの担任・副担任等）のほかに，ヴァイオリン演奏者にも同時期に観察調査をお願いし，後日，保育士の方には，アンケート調査（留置き式）を実施。演奏者には，聞き取り調査を実施した。

(6) 今回のピアノ演奏者は，調査者（徳留勝敏）。ヴァイオリン演奏者は知人（山口尚子氏）。

(7) 開始時期については，M保育園2021年9月27日～11月9日までの平日のみ（約1ヶ月半）。N保育園2021年10月6日～11月12日までの平日のみ（約1ヶ月半）。Y保育園2021年10月17日～11月30日ま

での平日のみ（約1ヶ月半）。

(8) 開演日時，M保育園2021年11月10日。Y保育園2021年12月1日ならびに2022年3月9日。N保育園2021年12月10日。開演時間は，各保育園午前11時～11時40分。場所は，各保育園教室。参加者は園児，保育士，内容は，園内の給食時にBGMとして流した曲のピアノ＆ヴァイオリン演奏会。

(9) 保育士によるアンケート自由記述回答は以下のとおり。文章は，こちらで簡素化して記述した。

1) 落ち着いた曲目が良いと思う。また，音量は一定の方が良いと思われる。
2) デンポの速い曲は，忙しさがあるように思い，ゆっくりしたテンポの曲が良いと思われる。
3) 曲の選曲の根拠は何かを知りたい。
4) 食事中に音楽を流すことはとても良いと思う。クラシック音楽もとても良い。
5) 静かな曲では，子どもたちを落ち着かせることができた。
6) 家でピアノを弾くマネをした園児がいたようだ。
7) ピアノを習っている園児がメロディを口ずさんでいた。
8) 身体を動かして聴いている園児がいた。
9) 演奏者を見て，指を動かしている園児がいた。
10) ちょうど聞きなれてピアノを弾く真似をする園児が増えてきたタイミングでの音楽会開催だったので園児はとても興味を持ってくれた。
11)「子犬のワルツ」,「トルコ行進曲」はリズムに合わせて指を動かしピアノを弾く真似をしていた。
12) ドビュッシーのアラベスクのようなゆったりした曲は，興味や集中が少しずつ薄れていった。
13) 子どもたちが口ずさんだりして歌う様子が見られた。
14) 毎日，同じ時間に曲をきくことが習慣となり，静かに曲を聞きながら給食の準備や食事をするようになった。
15) この機会をきっかけに，音楽を聴いて，「これはピアノだよ，これはヴァイオリンだよ」と興味を持つようになった。
16) 継続してCDを聴くことにより，音楽への興味関心が増してきた。
17) ピアニカ活動を行っているとき,「何の音かな？」「どの指で弾いているのかな？」と新しい反応が出てきた。
18) 演奏終了後も,「また聴きたい」と喜んでいた。
19)「この曲は明るいね」,「この曲は，暗いね」と長調と短調の感覚が違うことに気づいていた。
20) じっくり聴いている子，知っている曲を聴くと友達と顔を見合わせ笑顔になる子，リズムをとっている子，ピアノの演奏を真似する子がいた。

Musical expression outreach activities and expected results

— Based on the results of a survey of preschoolers —

Nobuyo KURODA・Katsutoshi TOKUDOME・Kuniko HORIO
Faculty of Human Sciences
Department of Psychology and Child Education
kurodan@toua-u.ac.jp　tokudome@toua-u.ac.jp　horio@toua-u.ac.jp

【Summary】

This study sheds light on the area of sensitivity and expression in the *Nursery School Childcare Guidelines* (announced in 2017). Its purpose is to explore what kind of efforts are necessary to cultivate rich sensibilities, imagination, and expressiveness, qualities set forth in 'Contents and Handling of Contents' in the *Guidelines* and thought to be fostered in children through the content (such as music, rhythm, and singing songs) of the musical experience.

Two years ago, we conducted an outreach activity at a kindergarten with the same purpose as that described above and obtained certain field survey results. In this study, we consider the actual situation of the music expression environment and the development of children's sensibilities, expressiveness, and other attributes, based on the results of the survey, with a nursery school the subject of the survey.

【keywords】 outreach activity / preschool education / developmental task / follow-up comparative study / expressiveness